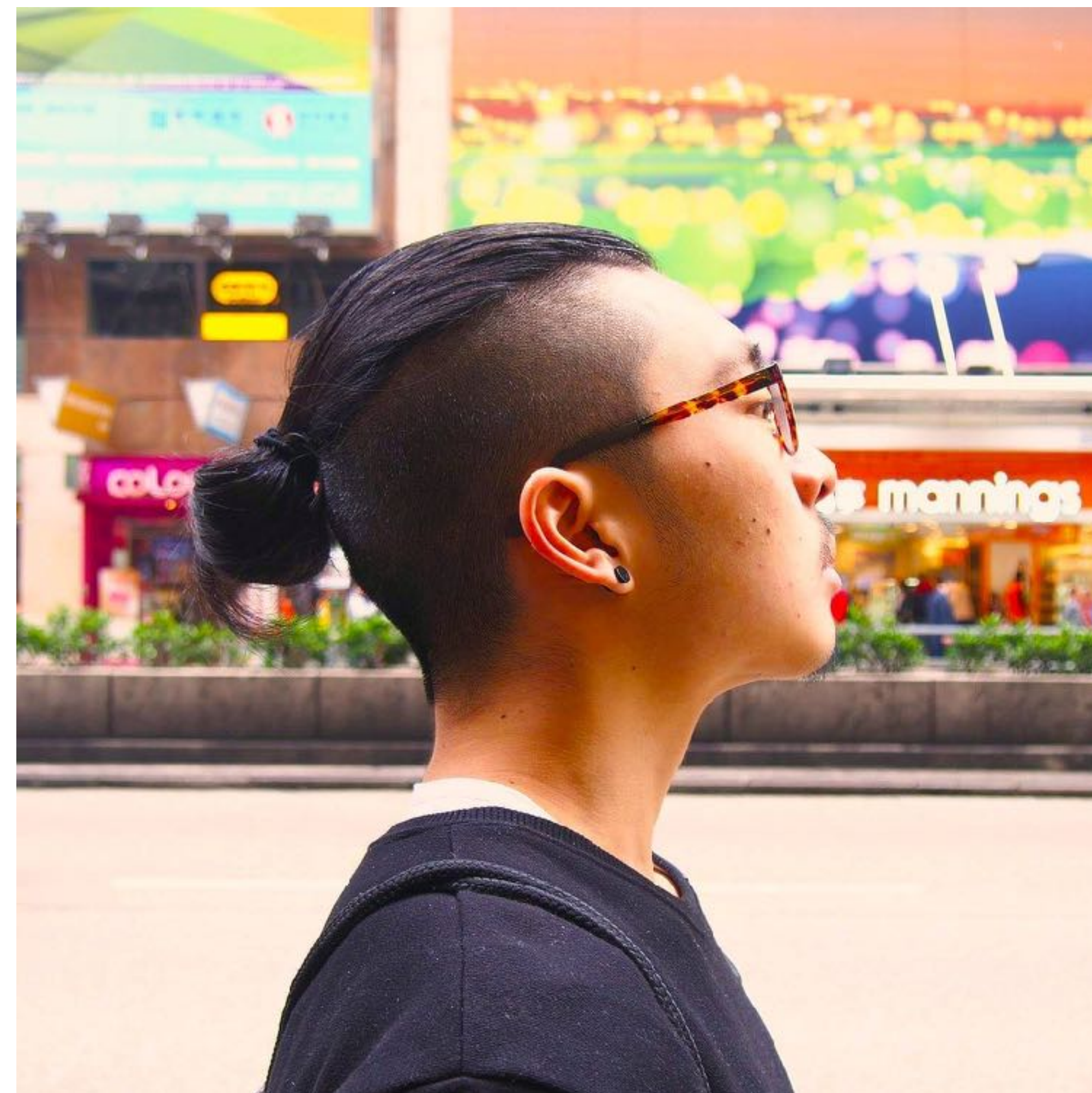


日本に生まれ、アメリカで育ち、日本で学ぶ私にとって

総合政策学部3年 清水快 71504152

自己紹介

- 1996年世代 総合政策学部4年 清水快
- 東京で生まれ、0歳2ヶ月からアメリカのテキサス州に旅たち、15歳に帰国した帰国子女
- ICU高校35期生、中学校はアメリカとともに川崎市立の中学校
- (旧) 筧研究会、水野大二郎研究会に所属
- kkshmz.github.io にてポルトフォリオ掲載



日本に生まれこととは

「日本」で生まれる不安

- 自分はアメリカに行くまでは入国に必要なビザ申請を逆算し、決定された日に東京の病院に生まれた
- どこでもそうであるが、その国に生まれることはその国の文化を受け継ぐことであり、先祖を受け継ぐことでもあると思う
 - アメリカでは第二次世界大戦についての歴史の勉強などをされるときには、多くいじめられてきた
- だが、すべてが悪いわけではなく、犯罪率が低く、治安がよく、コンビニが夜遅くまでやってると現代においては少なくとも便利なところになってる
 - けど、「日本」ではなく、「東京が」と適応するものが多い
 - 東京しか知らない自分が日本人として、日本を語れるのかが不安に感じる。

「働く」＝「傍（はた）を楽（らく）にすること」

- 日本には素晴らしい江戸の歴史が存在していて、それが日本の文化の根幹となっている部分は大きいと外国人としても感じる。
 - 昔は浮世絵書いて暇をしていて、みたいな像が浮かぶかもしれないが、そうではなくって、みんなは多様な仕事を受け継いでいて、働いていた
 - そして、明日も元気で仕事できるように、夕方になれば「あそび」に引っかけたこれを「明日備（あすび）」といい、リフレッシュするという習慣がある。
- アメリカでことわざがあり、「中国には中国人しかいない、アメリカにはインド人もスペイン人も、アフリカ人がいるから強い」と。
 - 一見鎖国の話に見えるかもしれませんが、僕的には文化と歴史の長さの違いを感じている。
 - 八十万神があるように八十万の仕事があるという考えとキリストのための仕事をする文化の違い



日本に学ぶことは

日本の大学で学ぶ前に

AO入試について

- SFCはAO入試の2期にて、合格し、入学した。
 - テーマとしては、「社会起業家における社会投資」で、面接官には竹中平蔵などと話した。
- そもそもの日本における大学の入試形態がアメリカとの違い、テストのみでの判断意について疑問を持ち、高校からAO入試に定めた
 - アメリカではボランティア時間の制度やエッセイなどが必要で、そこで人生経験や志望理由などを述べることができたのに、日本ではそれに値するものはどこにあるかと思ったら、AO入試しかなかった
 - なのにも関わらず、日本のAO入試は学力の低下として見られていて、純粹の知識量が経験を上回ったと感じた

入試後について

- そもそも日本における入試について考える前に、入試後の選択肢がどのような状況なのか
 - 品川のサラリーマンの流れに自分が飲み込まれて自分自身の個性が失われることを恐れていた。
 - 他の選択肢を見る際に、スタートアップの存在を知り、半年で100人ほど会い、スタートアップについて知り尽そうと心がけた。
- けど、やはり日本で大学に入りたいっていう意思があり、日本人生まれとして何も日本のことを知らなかったっという気持ちが大きかった

4年になって、日本で学んだ後について考える

- 海外の学会や海外の動向を常に意識し続けないと、食っていけない
 - 東京だからこそできることでもあり、地方だともう一つのレイヤーとして、「東京」自体を意識しなければならない気がする
- 日本で学ぶことによって、時間が無限にある、カリキュラムが厳しくないSFCだと特にそう感じる
 - そのために、研究や外部活動などが過去見つめたときに、どのような点を結ぶことができるのかが重要
 - 重要の上に、時間があるからこそできることもいっぱいある
 - 自分自身は1年生の時にフィンランドで開催されているイベントを日本に持ち込み、設計から営業からすべてやった

